君と最終形態

現地　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と最終形態

【Ｎコード】
Ｎ６３０３Ｙ

【作者名】
現地　晶

【あらすじ】
気まぐれな魔王に魔人ザイドは、人間界からの贈り物として魔界に連れて来られた女、シェリーを押し付けられた。
悲しみに沈むシェリーとシェリーに惹かれながらも距離を置くザイド。
そんな二人の関係を変えたのは、ほんの小さな破壊光線だった。
※後半に軽い暴力描写あり。苦手な方はご注意ください。１０ページ程度の短い話です。

プロローグ

コホコホと咳が出る。

ザイドは大きな体を捻り、枕に額とツノを押し付ける。切ることを怠り長くなってきた黒髪が、シーツの上に広がった。

数日前から続く体調不良は一向に治まる気配がなく、ついにザイドは寝込んだ。

『疲労と魔力が溜まり過ぎていますよ。これはもう静養し、ある程度魔力が放出されるまで様子を見るしかありません』

今朝診てもらった医者は、そう言って薬も出さずに帰って行った。なす術も無くベッドに転がるだけとは、なんと無様なのだろう。体調管理が出来ていなかった自分に苛立つ。

「コホコホ」

咳が出る度に、口から一緒に小さな破壊光線が出る。

ああ、と溜息を一つ。枕が穴だらけになった。

体を上向かせると、カーテンの隙間から差し込む月明かりが少しだけ眩しく感じる。なんとか眠ろうと目を閉じて――しかし咳は止まらない。

「コホコホ……ケホ！」

苦しい。

咳をした瞬間、少しでも楽な姿勢を取ろうとして横を向いたのがいけなかったのか――。

「……！」

口から飛び出した破壊光線は細く伸び、隣室との間の壁に小さな穴を開けた。

1

白い肌、金の髪、ツノの無い頭――。

目の前に座る小さな人間の女を、魔人ザイドは呆然と見下ろす。

友好の証として人間界から魔王に贈られた女は、『いらないからやる』と一言書かれた紙と共に、ザイドの屋敷へとやって来た。

ザイドは紙に書かれた言葉を何度も見直す。筆跡は間違いなく魔王のもの。しかし何故自分の元に……。気紛れな魔王の行動に戸惑いを隠せない。

女が贈り物の一つとして魔王城に届けられたのは今朝。昼間、顔を合わせた時には魔王は何も言ってはいなかった。それなのに夜になり、いきなりこのようなことになるとは思いもよらなかった。

受け取りを拒否することは、魔王の臣下のザイドには不可能だ。

そして――。

ザイドはそっと溜息を吐く。

周囲からすれば、女はザイドの情人ということになるだろう。

まだ妻も娶っていないというのに、妙なことになった。たとえザイドにその気はなくとも噂は広がる。だからといって仮にも人間界からの贈り物、魔王陛下より下賜されたものをぞんざいに扱うわけにもいかない。

本来なら王の後宮に入れるべきだったのではないかと、ザイドは微かに眉を寄せながら女に話しかけた。

「名は？」

女が俯いたまま小さな声で答える。

「シェリーと申します」

望んで魔界に来たのではないことは、シェリーの表情からすぐに

分かった。
「私はザイドだ」
「……ザイド様、よろしくお願い致します」
自分がどういう立場か分かっていての言葉なのだろう。ギュッと拳を握りしめる姿が憐憫を誘う。
「歳は？」
「十七になりました」
若い、とザイドは内心驚く。
結い上げられた髪と無駄な装飾の無いドレスは、シェリーを年齢よりもずっと大人びて見せていた。
どういう事情で『贈り物』になったのかは分からないが、このような若い女がたった一人で魔界に取り残されて、さぞかし不安だろう。
今にも倒れそうな様子に心配になり、青白い顔に思わず手を伸ばすと――ビクリと震えて怯えた目を向けられた。

「……」

怖いのか。人間と違う緑色の肌が、頭から生えた二本のツノが、鋭い牙と赤い目が――。
種族が違うのだから仕方がない。だが、きっとそれだけではなく……。
シェリーの目に浮かぶ涙に、ザイドは伸ばしていた手を引いた。
「人間界からの長旅で疲れただろう。執事に部屋に案内させるので、ゆっくり休むといい。それから何か必要な物や困ったことがあれば、そこら辺にいる者に遠慮なく言いなさい」
ザイドは搾り出すようにそう言うと、客間から出ていく。
怖がらすつもりも、立場がどうあれ手を出すつもりも無かった。

シェリーの悲しみを湛えた瞳は儚く揺れていて――ザイドは胸がチクリと痛んだ。

◇◇◇◇

あれから一月、ザイドはシェリーと出来るだけ顔を合わせないようにしていた。

空き部屋が無いという理由から、シェリーにはザイドの部屋の隣、いずれ嫁いでくるであろう未来の伴侶の為に用意していた部屋をとりあえずあてがった。

部屋は隣同士なのだが、ザイドは朝早く職場である城に行き夜遅く帰ってくることで鉢合わせを回避し、身一つで来たというのに何も言わないシェリーの為に執事にドレスも用意させ、不自由な思いだけはさせないよう気を遣っていたつもりだった。

それなのに、この体調不良。暫く仕事には行けそうにない上に――。

ザイドはベッドから出て、穴の空いた壁に駆け寄る。

「シェリー、大丈夫か？」

破壊光線が当たってはいないか？

身を屈めて小さな穴に片目をあて、隣の部屋を覗く。その瞬間、コホコホと咳が出て、壁に拳大の新しい穴が開いた。

ああ、なんてことだ。自分に舌打ちしながら新しく開いた穴から隣の部屋の中を見る。

ベッドの上にシェリーは座っていた。

「シェリー……！？」

その姿にザイドは驚く。初めて会った時にも随分痩せた体だと思

ってはいたが、今は更に痩せ細っていた。
呆然とするザイドに、シェリーは怯えた表情で答える。
「はい、大丈夫です」
破壊光線は当たってはいないようだが、どう見ても大丈夫な様子ではない。
会わないようにとばかり考えて行動していたが、まさかこんなことになっているとは思いもよらなかった。
執事に任せきりではなく、もっと気にかけてやるべきだったと後悔しながらじっと見つめていると、シェリーが細い指で掛け布を掴み、胸元まで引き上げる。
その様子にハッと気付いた。薄い夜着一枚の若い女をこのようにじろじろと見るなど失礼だった。
またしても後悔するザイドに、シェリーが小さな声で訊く。

「ザイド様は……大丈夫、でございますか？」

何を言われているのか、ザイドは一瞬分からなかった。
「……」
シェリーをじっと見つめ、それが自分の体調のことを指していると気付き、ザイドは驚き上擦った声を出す。
「あ、ああ、すまない。咳がうるさいだろう？」
「いいえ」
小さく首を振るシェリー。
きっとうるさいに違いない。だがそれを口に出さずに心配してくれるシェリーの優しさに、ザイドの胸が少し熱くなった。
「今宵はもう遅いので、壁は明日の朝に職人を呼んで修理させる。すまないが一晩だけ我慢してくれ」
「はい」
素直に頷くシェリーにザイドも頷き返し、気になっていたことを尋ねる。

「ところでシェリー、食事は食べているか？」
「はい」
「……そうか、何かあればそこら辺の者にでも言いなさい」
食べていて、それほどまでに痩せはしないだろう。
壁から離れてベッドに戻り、シェリーの部屋とは反対方向を向いて横になり、ザイドは考える。

どうにかしてやらねばならない。

朝、まずは壁を修理させて、それから執事にシェリーについて話を聞こう。
そう決めて目を閉じる。

コホコホと咳が出た。

2

朝、枕元の呼び鈴を鳴らし、ザイドは執事を部屋に呼んだ。

「失礼します、ザイド様。お加減は――」

部屋に入ってきた、薄紫の肌と白い髪に短いツノのある小柄な執事が、そこまで言ったところで壁の穴に気付いて驚いた。

ザイドが説明をする。

「破壊光線が当たってしまった。職人に修理を頼んでくれ」

「はい」

執事はすぐに職人を呼び、そして職人はあっという間に壁を修理した。

ザイドがホッと息を吐く。壁は何とかなった。あとは――。

職人を見送って部屋に戻ってきた執事を、ザイドは手招きする。

「なんでしょうか、ザイド様」

執事が傍まで来ると、ザイドは小声で訊いた。

「シェリーはどうしてあれほど痩せたのだ？　シェリーの食事は、ちゃんと人間界の食べ物で作っているのだろう？」

執事が頷く。

「はい。ザイド様のお言い付け通り、人間界の食べ物をシェリー様には出しております。しかし残されることが多くて……」

困ったように執事は眉を寄せた。

シェリーの為にザイドは、魔界では珍しい人間界の食材や調味料を取り寄せていた。多少値は張るが、ザイドの家は元々裕福であるし、何よりザイド自身が魔王の側近としてそれなりの収入があるので、それくらいの出費は痛手にはならなかった。

ザイドが顎に手を当てる。

「ふーむ、味付けに問題はないか？」

「シェリー様には何度かお口に合わないのかとそれとなくお聞きしたのですが、美味しいとおっしゃられるばかりなのです。それならばと好きな食べ物や味付けをお聞きしても、特に無いと首を振られてしまいました。料理人は人間界で修行経験のある者を新しく雇い入れましたし、食材や味付けも試行錯誤してはいるのですが、今のところ効果はありません」

執事の話にザイドは唸った。料理に問題がないのなら、気持ちの問題なのか。横を向いて咳をして、ザイドは顔を戻す。

「このままではいけないな」

「もっと早く報告するべきでした。申し訳ございませんでした」

頭を下げた執事に、ザイドは首を横に振る。執事の態度から、シェリーを避ける自分に気を遣ってこれまで黙っていたのだと、ザイドには分かっていた。

「いや、いい。それよりこれからどうするかだ」

「このまま食べなければ、お体に影響が出てくるかもしれません。料理人と相談してお食事を食べてもらえるように努力いたしますが――ザイド様の次回診察時に、シェリー様も医者に診てもらいますか？」

「そうだな……」

魔人と人間では体のつくりが違うので医者にも詳しくは分からないかもしれないが、それでもあれほど痩せたのだから、一度診てもらったほうがいいか。

コホコホと咳をして、ザイドは頷いた。

「分かった、そうしよう。それから何か、シェリーの心が休まるようなものを……そうだな、音の鳴る人形がいいか」

「『イスプス人形』でございますか？」

「ああ、そんな名だったか。それを贈ってくれ」

「はい」

執事が部屋から出て行く。

ザイドは大きく息を吐いてベッドに体を横たえ、シェリーのこと

を考えた。
やはり人間界に帰りたいのだろう。だが帰ったところで、一度魔界に贈られた者――魔人の情人になった者を、おそらく周囲は温かく迎えてくれはしない。
魔界と人間界は友好関係にはあるが、決して対等な関係ではない。人間は魔人を嫌い、恐れている。だからこそ人間の基準で美しいシェリーを贈り物の一つにしたのだろう。シェリーならば王が気に入るとでも思って。
しかし人間は知らないようだが、魔人にとっての美しさとは、ツノや牙や目の美しさであり、それはつまり魔力の強さである。そういう意味ではシェリーは何の魅力もない女なのだ。だが……。

シェリー……。

チラリと二人を隔てる壁に視線を向ける。
ザイドはシェリーのその儚さを放ってはおけなかった。魔界に連れてこられ、魔王の命令とはいえ自分のもとにやってきた不運な女に、出来るだけ心安らかに居てほしい。そう思っていた。
コホコホと咳が出て、慌ててシェリーの部屋に背を向ける。
そしてザイドは、いつの間にか眠った。

◇◇◇◇

コホコホ、ゲホゲホ。

咳で眠りから覚める。
ああ、眠ったのに疲れているとは、と苦く思いながら重い瞼をゆっくりと開け――そこでザイドは驚いて体を起こした。

「シェリー……！」

これはまだ夢なのか。だが目を擦ってもう一度目の前を見ても、やはりそこにはドレス姿のシェリーが立っていた。

ザイドの大きな声に、シェリーはビクリと震えて俯く。

「あの、あまりに苦しそうだったので気になって……。勝手にお部屋に入ってしまい、申し訳ございません」

怒られたとでも思ったのか、両手を胸に当てて頭を下げるシェリーに、ザイドは慌てて首を横に振った。

「い、いや、構わない。顔を上げてくれ」

「……はい」

シェリーがゆっくりと顔をザイドに向ける。ザイドは息を呑んだ。

これほど近くで見たのは初めて会った日以来だ。シェリーの深い青の瞳に見つめられると何故かドキドキと胸が鳴り、そっと右手でシーツを握りしめる。

「今は何時だ？」

そんな自分の状態を誤魔化すように時計に視線を移し――しかしそこでザイドは目を見開いた。

視界の端に映った光景。

「壁が……！」

シェリーの部屋との間の壁に、ザイドさえ余裕で通れるほどの大きな穴が開いていた。

「シェリー！　怪我は！？」

叫びながら思わず立ち上がり、咳き込む。破壊光線が飛び出し、シェリーが体を引いた。

ああ、また怖がらせてしまった……。

ベッドに力なく腰を下ろし、ザイドは息を整える。

「すまない。寝ている間に破壊光線で壁を破壊してしまったのだな。怪我は？」
シェリーが小さく首を横に振った。
「いいえ」
「……そうか」
シェリーを上から下まで念入りに見て、ザイドは額に手を当てる。何処も怪我はないようだが、無意識にこんな大きな破壊光線を放ってしまうとは危険だ。もしシェリーに当たっていたらと考えると背筋が寒くなる。
シェリーは部屋を、いや、自分が別の部屋に移動しようと考えて思い出す。今現在この屋敷に空き部屋は無かった。執事に命じて物置部屋でも無理矢理空けさせるか、それがどうしても無理ならば庭の蟲小屋にでも住むしかないか。
そうだ、そうすればいいと自分に言い聞かせながらシェリーに顔を背けて咳をしていると――。

背中に何かが触れた。

それがシェリーの手だと気付くまで、およそ十秒。
ザイドがゆっくりと振り向く。
「シェリー……」
シェリーは優しい手つきでザイドの背を撫でる。
「ありが……とう」
感謝を述べると、シェリーの口角がほんの少し上がった。

笑った……。

ぽかんと口を開けて、ザイドがシェリーの顔を見つめる。
不思議なことに、咳が止まっていた。

3

シェリーの細い指が、労るようにザイドの大きな背中を撫でる。

温かい――。

魔力がない人間の手から、言葉には出来ない力を感じた。体がとろけるような感覚。あまりの心地良さにザイドがうっとりと目を閉じた時――、コンコンとノックの音がしてドアが開いた。

「ザイド様、夕食は――」

そう言いながら入ってきた執事の言葉が途切れる。

シェリーの手がビクリと震えてザイドの背中から離れた。

「シェリー様……？」

目を見開いて執事が呟く。

「いや、これは――」

ザイドが言葉を発しようとしてまた咳き込み、シェリーが再びザイドの背を撫でた。

「し、失礼を致しました」

寄り添う二人の姿を何と思ったのか、踵を返して去って行こうとする執事をザイドが慌てて呼び止める。

「待て、何か用では無かったのか？」

執事は振り向いて、頭を掻いた。

「はぁ、夕食の時間をお聞きしに来たのですが……」

もうそんな時間だったのか。随分長い時間眠っていたのだなとザイドが驚く。そして時間が分かった途端、空腹感が襲ってくる。

「夕食を持って来てくれ。それと壁をまた破壊してしまったので職人に修理を頼んでほしい」

「壁……ああ、これはまた大きな穴が開いておりますね。分かりました。職人を呼びます」
ザイドに言われて初めて穴に気付いた執事は、その大きさに驚きつつ頷いた。
「ああ、それから――」
ザイドはシェリーをチラリと見て、執事に訊く。
「物置部屋を片付けて、住めるようには出来るか？」
執事が首を傾げた。
「物置部屋でございますか？　それならば今は綺麗に模様替えをして、新しく雇った料理人が使っておりますが……」
しまった、とザイドは内心舌打ちする。新しい料理人の為に、物置部屋を空けたことをすっかり忘れていた。
「物置部屋は一つしかなかったか？」
「いえ、いくつかございますが、荷物が沢山詰め込まれておりますし、何より住めるほど広い部屋ではありません。突然どうされたのですか？」
広い敷地の割に小さいザイドの屋敷は、部屋数も少ない。それゆえに、ザイドとシェリー、それに住み込みで働く使用人で満室になっていた。
ザイドが唸る。
「シェリーが危険なので別の部屋に移ろうかと思ったのだが……」
こんなことになるなら、増築しておくべきだったと後悔する。
「生憎何処も空いてはおりません」
申し訳なさそうに眉を下げる執事。ザイドは小さく息を吐いた。
仕方が無い。
「ならば蟲小屋で良い」
ザイドがそう告げると――。
「え……？」
「蟲小屋、でございますか？」

シェリーと執事の声が重なった。ザイドが視線を横に移すと、軽く目を見開いたシェリーと視線が合う。
「どうした、シェリー」
戸惑うように揺れる瞳に、ザイドは眉を寄せた。
シェリーが一瞬迷って口を開く。
「ザイド様が小屋なんて……」
ああ、とザイドは気付いて首を横に振った。
「気にすることはない。子供の頃はよく、蟲小屋で蟲と一緒に寝ていたからな」
大きくなってからはさすがに小屋に泊まることも無くなったが、それでも何とかなるだろう。
シェリーが俯く。
「でも……ザイド様は……その、体調が優れないようですし、それならば、わたくしが小屋に行ったほうが……」
「いや、シェリーにはきつかろう」
『蟲』というのは人間界にいる虫――昆虫やムカデなどの多足類と多少似てはいるが、まったく別の生物であり、人間界のそれとは違い巨大でもある。魔界では蟲は『蟲車』という乗り物を引いたり、畑や炭坑などでも活躍する慣れ親しんだ便利な生物なのだが、人間のシェリーにはその姿は恐ろしく映るだろう。
「でも……」
両手を胸の前で握りしめるシェリー。その細い指を見つめ、ザイドはもう一度首を横に振る。自分よりか弱いシェリーを小屋に住まわせるわけにはいかない。
そんなザイドとシェリーの様子を見て、執事が小さく唸って提案した。
「では、使用人部屋を空けましょう」
執事に視線を移し、ザイドが首を傾げる。
「それではお前達が困るのではないか？」

「元々使用人一人に一部屋与えていただいていたのが贅沢だったのです。相部屋にいたしましょう」
「しかし……」
それでは互いに気を遣い、大変だろう。躊躇するザイド。その姿を見て、シェリーが呟くように言った。
「ザイド様、わたくしはこのままでも大丈夫でございます」
「シェリー……う、ゴホッ」
ザイドの口から出た破壊光線がシーツに穴を開ける。シェリーがザイドの背中を撫でた。
「すまない」
「いえ……」
言葉では大丈夫といっても、やはり無理しているのだろう。シェリーの表情は少し強張っていて、そんな姿を見ていると離れてしまうのも心配になる。
どうするか。安全の為には離れたほうがいい、が、シェリーの白い肌や浮き出た鎖骨を見ると、どうにも離れたくない思いが強くなる。
暫くじっと考えて、ザイドは結論を出した。
「職人を呼び、壁の修理をしてもらってくれ。部屋はこのままでもう少し様子を見る」
執事が頭を下げる。
「かしこまりました」
これで良かったのかは分からない。深く息を吐き、ザイドは部屋から出て行く執事の姿を見つめ、それからシェリーに視線を移す。
「もしまた壁に穴が開くようなことがあれば、すぐにこの部屋から移動する。だから……その、もう少し辛抱してくれ」
シェリーは少しだけ口角を上げて、首を横に振った。
「辛抱だなんて……ここはザイド様のお屋敷です」
「それはそうだが、今はシェリーが住む屋敷でもある」
「ザイド様……」

その時、コンコンとノックの音が聞こえ、執事が再び現れた。執事は料理の載ったワゴンを押して、部屋に入ってきてザイドに訊いた。

「シェリー様のお食事も、こちらで宜しいのでしょうか？」

「いや、シェリーは……」

言いかけて、ザイドは口を噤む。シェリーは自分と食事などしたくはないかもしれないが、この機会に少しだけ話と、それからシェリーの食事の様子を確認しておきたい。そして何より――この温かさにもう少しだけ触れていたい。

躊躇しながらザイドは、シェリーの青い瞳を見つめて口を開いた。

「もしよければ一緒に食事をしないか？　いや、決して強制ではない」

断られるだろうか？

情けなくも緊張で小さく震えてしまった指先を、ザイドは膝の上で擦り合わせる。

「……」

「……」

少しだけ間があり、シェリーは小さな声で答えた。

「はい」

ザイドの胸がドクリと鳴る。

「そ、そうか」

一緒に食べてくれるのか。

牙を剥き出して、ザイドは微笑んだ。

◇◇◇◇

ザイドとシェリーは破壊光線が当たらないように斜めに並んで座り、執事がテーブルに二人分の食事を並べた。

「さあ、食べなさい」

シェリーは「はい」と返事しながらも、ザイドと自分の前に置かれた料理を交互に見た。

「あの……」

「なんだ？」

「……ザイド様のお食事とわたくしの食事は、随分と内容が違うのですね」

ああ、とザイドは頷く。

「私が食べているのは魔界の料理だ」

「魔界の……」

「味が濃く硬いので、シェリーの口には合わないだろう。それより食べなさい」

「……はい」

促されて料理を小さな口に運ぶシェリー。ザイドはその様子をじっと見つめた。

「シェリー、美味しいか？」

「はい」

「もし口に合わなければ、遠慮なく言いなさい」

「いえ、本当に美味しいです」

嘘を吐いている感じではない。

「そうか、ならば良い」

少しだけほっとして、ザイドは自分の料理を口に運ぶ。

会話が途切れ、二人は黙々と目の前の料理を食べた。

「コホコホ――」

食事の途中でザイドが横を向いて咳き込み、小さな破壊光線が飛び出す。
魚を食べようとしていたシェリーの手が止まった。
「大丈夫、でございますか？」
「ああ、すまない」
呼吸を整えて振り向けば、じっと見上げてくる視線。
「……怖いか？」
思わず訊いていた。
シェリーが目を見開き、次いで視線を彷徨わせる。
ああ、そうか……。
しかしそれも当然か、と肩を落とすザイドに、シェリーは俯いた状態でゆっくりと話し始めた。
「魔界に来て初めて魔人を見たので……驚きました。しかしザイド様も皆様も優しくしてくださるので、怖くはありません」
無理をしているのだろう。それでも怖くないと言われればやはり嬉しい。
「……そうか」
「それと、お礼が遅れてしまいましたが、人形をありがとうございます」
「人形……？」
何のことかと一瞬考えて気付く。そういえば今朝、執事に人形をシェリーに贈るように指示していた。
「ああ、気に入ってもらえたか？」
「はい。少し変わった姿をしておりますが……可愛らしい人形ですね」
「イスプス――安らぎの精霊だ」

「安らぎの精霊、でございますか？」
ザイドが頷く。精霊イスプスは周囲に安らぎを与えると言われていて、魔界では赤ん坊が生まれると、イスプスを模った人形を贈る習慣がある。
シェリーは勿論赤ん坊ではないが、安らぎを与えてやりたいという思いから、ザイドはイスプス人形をシェリーに贈るように執事に命じたのだ。

「ありがとう、ございます」

上目遣いで礼を言われ、ザイドが視線を逸らす。
「いや、これくらいは……それより食べなさい」
「はい」
シェリーに食事を勧め、ザイドは目の前の肉を少しだけ乱暴に切って口に運んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6303y/

君と最終形態

2011年12月22日23時47分発行